

2020年4月1日 水曜日 読売新聞朝刊掲載

「水産・林業で障害者活躍」より一部抜粋 ※転載許可済み

企業に貸農園 雇用を支援

障害者らの働く場を生み出したとしても、社内にノウハウがなく、二の足を踏む企業も多い。業種によっては、職場でそれぞれの障害者の適性に合った仕事を見つけていくケースもある。こうした状況を踏まえ、企業の障害者雇用を支援する企業もある。

2月上旬、千葉県柏市にあるビニールハウスの農園で、知的障害のある男性(40)は、サンチュを収穫していた。

男性は総合設備会社、九

電工の社員で、カブやキャベツ、トマトなど、その時にあった野菜を育てる。「農作業は自分のペースで仕事ができる。苦手な作業が上手になった時や、収穫する時がうれしい」と話す。

ビニールハウスは、障害者雇用のコンサルタント会社「エスプールプラス」(東京都)が運営する企業向けの貸農園だ。働く人の7割が、身体障害者に比べて雇用者数が少ない知的障害者だ。

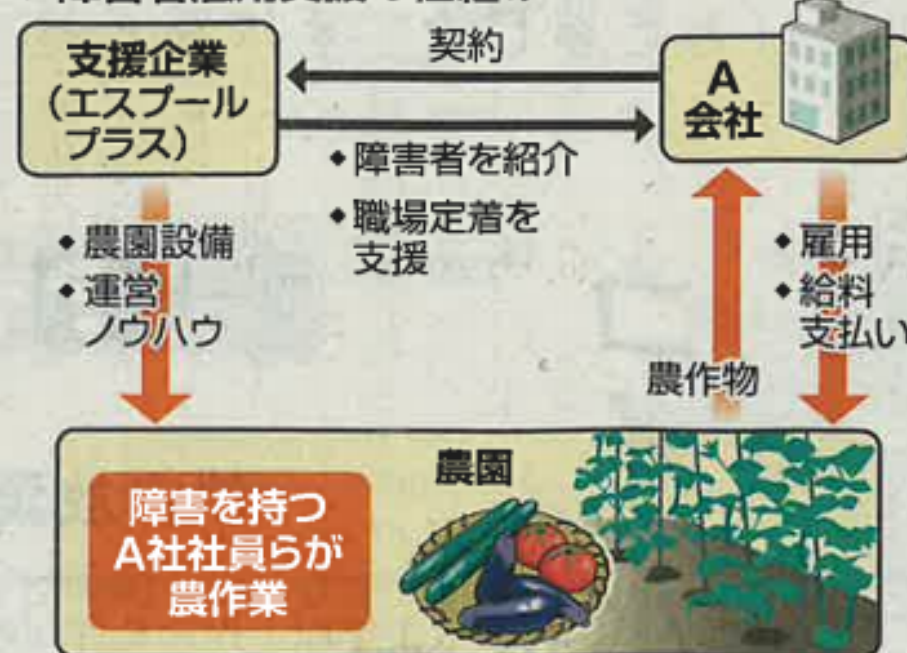
障害者はエスプールプラ

スが募集し、利用企業に紹介する。企業は障害者を最低賃金以上で雇用するが、職場は農園となる。

作業する高さを低くして見通しを良くするなど工夫された農園では、様々な企業に所属する障害者が働いている。収穫物は、利用企業が従業員に配ることが多いという。農園は全国に19か所あり、約250社が1500人以上を雇用している。

企業にとっては、農園で働く人数を自社の障害者雇

◆ 障害者雇用支援の仕組み



用率に算入できるメリットがある。ある利用企業は、「障害者を雇用したくても、建設業の仕事内容から、担

てもらう仕事を決めるこ

とが難しかった。自社ではノウハウもないので、農園はありがたい」と評価する。ただ、障害者のみを、別の職場で働かせる形で法定雇用率を達成する仕組みについては、「共生」の観点から慎重意見もある。

エスプールプラスの担当者は、「本来は障害の有無にかかわらず、同じ職場で